

「IJIJIN」 Kの性格 (教科書以前の部分より)

| 段 | 頁 | 事項 | Kの性格 |
|----|-----|---|---|
| 二二 | 二〇一 | 「Kが養家の希望に背いて、自分の行きたい道をこうとしたとき、賛成したものは私です。私はそうかと云って手を拱いでいるわけに行きません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出ました。するとKは一も二もなくそれを跳ねつけました。」 | 自尊心が強い。 他人に頼っていきるのがいやだ。 |
| 二三 | 二〇七 | 「仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢をいうのをあたかも不道德のように考えていました。」 | 禁欲的な性格。 自分に対して厳しい。 宗教の教えは絶対という考え。 |
| 二四 | 二〇九 | 「彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして口出先へ出た通りを、行為で実現しにかかります。」 | 有言実行 |
| 二五 | 二一一 | 「彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において偉大なにすぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。」 | 口に出したことは、どんな困難があろうとも実行する。たとえそれが自分を破壊することでも。 ? 「自己の成功」? |
| 二七 | 二二六 | 「Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合ったところへ、Kを引っぱり出すとか、どっちでもその場合に応じた方法をとって、彼らを接近させようとしたのです。もちろんKはそれをあまり好みませんでした。……Kはあんな無駄話をしてどがおもしろいというのです。」 | 女性には興味がない。 自分の道に進むため以外のことには全く興味がない。 |
| 二八 | 二二〇 | 「彼は二人の女に関して寄りも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。」 「Kは私に向かって、女というものは何にも知らないで学校を出るのだと云いました。」 | 女に対する軽蔑。 |
| 三一 | 二二六 | 「不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振りに全く気がついていないように見えました。……Kは元来そついう点にかけると鈍い人なのです。」 「私がこう云った時、彼はただ自分の収容が足りなから、他にはそう見えるかもしれないと答えただけで、いっこう私を反駁しようとしませんでした。」 | 恋愛に全く興味がないから、私の行動から恋愛感情を読みとることが出来ない。 自分の進む道・学問に関して、謙虚である |